

～茎数を確保しているほ場は早めに中干し実施を～

7月 日	上旬			中旬			下旬		
	1	5	10	15	20	25	30		
生育	最高分げつ期			幼穂形成期			減数分裂期		
	10 葉期			11 葉期			12 葉期		
水管理	中 干 し			間 断 か ん 水			湛水管理：カドミウム吸収抑制対策		
	湛水管理は8月下旬まで								
作業	畦 畔 草 刈 り ～ 斑点米カメムシ対策 ～ 草刈禁止期間※								
	※9月上旬まで。ただし出穂期10日後頃の薬剤散布後7日以内に一度草刈りを実施する。								
	葉いもちが発生した場合								
	ブラシン剤かノンプラス剤を散布			ビーム剤の追加防除			穂いもち防除を実施する場合 コラトップ粒剤5を散布		

1 生育状況 ～ 5月は生育停滞、6月は回復傾向 ～

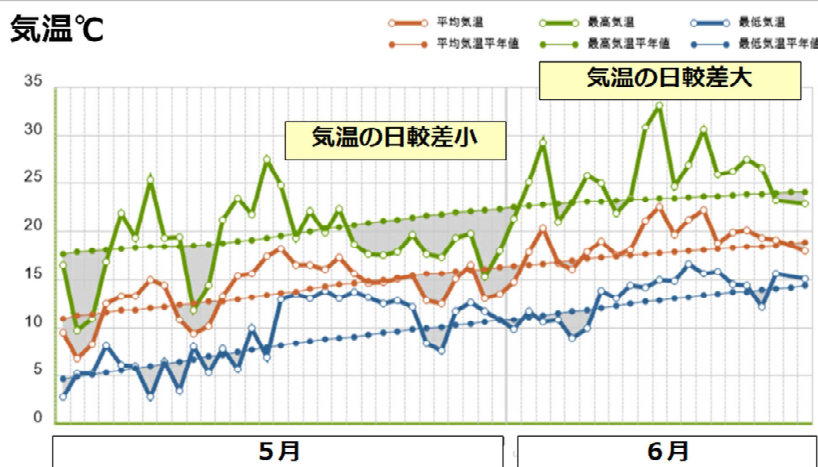
5月中旬から5月末までは、低温かつ気温の日較差が小さい気象が続いたため、分げつの発生が少なく、茎数は平年よりも少なく推移しました。

6月に入り、日照時間が多く、気温の日較差も大きくなっているため、生育は回復傾向にあります。

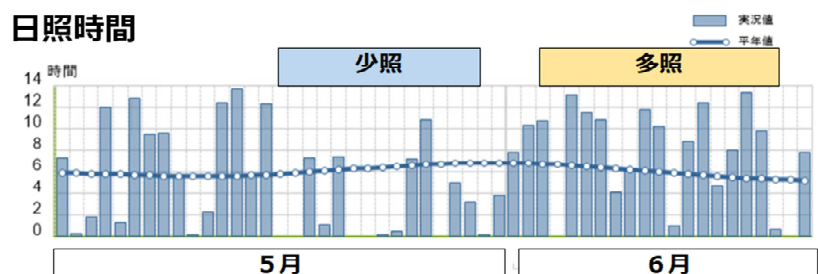
6月10日調査では、草丈は平年並み、茎数は平年よりも少なく、葉数はやや少ない状況でした。

6月は分げつ発生に好条件な気象が続いているため、茎数は回復していると考えられます。

気温℃



日照時間



2 水管理 ～ カドミ対策の湛水期間は7/15～8/25が目安 ～

- 目標穂数と同数の茎数を確保できたほ場では、中干しを実施して無効分げつを抑制します。無効分げつを抑えることで稲体の消耗を防ぎ、稔りの良い穂が確保できます。
- 生育が旺盛なほ場は、既に目標茎数に達しています。ほ場毎の生育状況に合わせて中

干しを開始してください。

- 中干しの程度は、田面に軽く亀裂が発生し、歩いて軽く足跡がつく程度として、7日から10日程度ほ場を乾かし、遅くとも幼穂形成期前までには終了します。
- その後はカドミウム吸収抑制対策として、出穂前後各3週間の7月15日から8月25日まで湛水管理を徹底してください。
- 湛水管理を行うことで田面が空気に触れないように保ち、還元状態にすることでカドミウムの溶出を抑え水稻に吸収されるのを防ぐことができます。

3 追肥 ～ 幼穂形成期の生育・栄養診断を実施しましょう ～

幼穂形成期の生育による追肥の診断(暫定案)

生育型		生育過剰	理想的な生育	生育不足
草丈 (cm)		65 cm以上	60～65 cm	60 cm以下
葉色 (SPAD502) (葉色板)		42以上 (5.5以上)	39～42 (4.5～5.5)	39以下 (4.5以下)
				
追肥 (N成分)	幼穂 形成期	なし	ムラ直し1 kg/10a	1～2 kg/10a
	減数 分裂期	なし	1～2 kg/10a	1～2 kg/10a

注) あきたこまち、目標収量 570kg/10a

幼穂形成期(幼穂2mm、7月15日頃)の極端な葉色低下は、1穂粒数の減少・有効茎歩合の低下を招きます。幼穂を確認し、表を参考に生育・栄養診断を実施して下さい。

- 幼穂形成期に草丈65cm以上で葉色が濃い場合は、穂肥は控えます。
- 幼穂形成期に草丈60～65cmで、葉色の低下が見られる場合は、減数分裂期(葉耳間長±0cm、7月25日頃)主体の追肥を実施します。
- 幼穂形成期に草丈60cm以下で、葉色が低下している場合は 幼穂形成期(7月15日頃)と減数分裂期(7月25日頃)の追肥を実施します。
- 一発型の肥料を施用した場合は、基本的には追肥は控えるようにします。

4 病虫害防除 ～ 畦畔等の草刈りを徹底して斑点米カメムシを抑制～

①いもち病

- ほ場の見回りにより早期発見に努め、病斑を発見したら直ちに予防剤と治療剤の混合剤(ブラシン、ノンブラス)を散布して下さい。
- 葉いもちが多発しているほ場では、出穂15～7日前にコラトップ粒剤またはゴウケツ粒剤(サンブラス粒剤)を散布するか、出穂直前にビーム剤(またはトライフロアブル)と穂揃期にラブサイド剤(またはトライフロアブル)で茎葉散布を行います。

②斑点米カメムシ

- 畦畔や農道等の草刈りは、出穂10日前までに徹底しイネ科雑草の除去に努めます。
- 水田内にホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエの残草があると、アカスジカスミカメの侵入を助長するので、水田内の雑草対策を徹底しましょう。